

65 六道閻魔堂

伝承地：西原1-6-11

話者：2・6 参考文献：1



(閻魔堂)

現在の西原1丁目の新川沿いに閻魔堂がある。伝承によると、弘法大師がこの地を巡錫した時、ここに草庵を結んで、丈8寸の行基作の閻魔像を安置し、この地を六道と呼んだという。六道とは仏教で地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道の六つの世界のことをいう。この堂の南の道が、元は六つの辻に分かれていたことによる。

後世、元禄14年(1701)光琳寺六世専營上人の時、堂宇を建立し、高さ8尺

余りの閻魔大王を祭ったが、戌辰の役及び明治10年の火災で焼失し、現在の堂宇は明治39年11月の建立であって光琳寺の所有である。なお行基作の閻魔像は光琳寺に今でも保存されている。

奈良に都があった聖武天皇の御代に、池や道や橋を各地につくり、人々から生き仏のようにあがめられた行基という高僧がいました。行基は欲のみにふけて来世に苦難をうけることを知らない人々が余りにも多いのを、あわれに思い、すみやかに仏法を信じて安楽浄土に生まれる方法はないものかと七日の間、阿弥陀仏を念じました。

満願の日の暁に大忿怒の相で閻魔大王が現われ「汝末代の人々のために予の像を彫刻して罪悪の人々を救うべし。」と言うと御姿を消してしまいました。そこで行基はお告げの通り、尊像三体を彫刻して開眼供養すると、遠近の人々は在家出家を問わず袖をつらねてこれを持ち縁を結び、利益をこおむる人は天下にみちみちてきました。

その後、弘法大師が真言宗を広められた時、この尊像は大師に「子女と共に東国へ赴き迷える人々を救わむ。」と告げました。

大師が日光登山のおり、木像と共にこの地を訪れたところ、不思議にも常に災いから大師をお守りになられたので、この地こそ有縁の地であると思われて、一字を建立し、あつく尊像を安置しまたこの地を六道と名づけられました。

元禄のころ、日野町の森幽可という人が不思議な利益をこおむり八尺の木像を彫刻してこの尊像をお腹ごもり奉り、それ以来お腹ごもりの尊像と称するようになったといわれています。

かくして、この尊像を拝して厄難を免がれ、二世安穩の大利得るものは年をへると共にその数を増していきました。

